

## その後、 何がどう なったのか

こんな泥だらけのパソコンは見た事がない！  
東日本大震災は、多くの人命と共にパソコンをも破壊した。  
それら 1,000 台の中から「無理だ」と言われたデータを救い出す。  
これを決して諦めなかった男たちがいた。  
この体験を次の世代に受け継いでいこう。  
そして来るべき次の震災に備え、我々は何をすべきなのか。



高田松原の奇跡の松。下部が緑色なのは、海水で痛んだ幹を保護するためのもの。

### 千から一へ

一本だけ生き残った、陸前高田千本松原。千本松から一本松へ。風光明媚で栄えていたこの辺り一面は、今や見渡す限りの廃墟である。かつての繁栄は見る影もない。想像を絶する破壊が行われたのだ。東北の方も、3/10までを千だとすれば3/11にはこれが一になってしまった。だが消滅はしていない。希望のシンボルとして知られる一本松は、この象徴であろうか。  
震災から5カ月を経た東北の地を、暑い盛り、終戦記念日に車で回った。仙台から海沿いに北へ向かうと、だんだんと被害状況が見えてくる。建物の外観が残っている塩竈は、あまり被害がなかったように見える。しかし、現実はこちらだ。駅前通りであつても、



気仙沼港の惨状。目に余る光景だった。住んでいた方達なのだろう、幾人もの方が探し物を探していた。

「孫も娘も流されてしまった…」  
なにげに聞こえてきた老婆の言葉に胸が張り裂ける。悲痛の初盆を迎えているのだろう。あらゆる県警のパトカーを見かける。たくさんのボランティアの方々や全国自治体や警察からの応援を受けている。そのせいなのか、何が運命を分けたのか…。  
夜に灯りが付くのはポツリポツリ。ほとんどの家に住む人はいないのだ。取り壊しも始まっている。箱だけ残っていても中はぐちゃぐちゃだ。石巻では港へ行く道が絶たれていた。気仙沼港の変わり果てた姿には言葉をなくした。だがこれでも充分片付いたのだと聞いたし、仮設の商店街計画も進んでいるようだ。基礎だけが残った大船渡の住宅地で見かけたモデルカー…。悲慘さを列挙すれば枚挙に暇ないが、一方では命を救った歩道橋がある。道一本隔てて景観が違う。  
何かが運命を分けたのか…。



この場所に船を運んで来た波のエネルギーとは、如何ほどのものであったのか。

ホテルは満杯、レンタカーはGW並みの忙しさだと言う。  
たまたま震災の日には南三陸のホテルで撮影をしていたというカメラマン佐藤彰展氏は、迫り来る津波を眼前で目撃した。家族が住む街が流されて行くのを見ながらも、宿泊客の対応を冷静にこなされていたホテルの従業員の方の姿を見、涙を止める術を知らなかった。冠水等で道路が寸断されたため、彼自身、三日間家に帰れず電話も通じずで家族には非常に心配をかけた。

宮城県では7万軒以上の家屋が消えた。しかし8月の仙台中心部を見る限りでは、ほとんど被害を思わせるものはない。中止になった多くのコンサートも秋になって再開されている。だが仙台市以外に復興どころではなく、未だガレキの街だ。復興の報道がテレビで流れたとしても、それはほんの一部の話。倒れた住宅や、陸に上がった「船」が至る所にある。行方不明者もまだ数千人に上る。

希望が見えなくては潰れてしまう。活気を取り戻しつつある仙台の街とガレキの街が対照的なのだ。

震災直後、仙台駅前のストリートミュージシャンは、仲間とともに炊き出しに立ち上がった。焼肉店では、ごはんのみそ汁だけではあったが無料サービスを行った。発電機があったからと、携帯の充電サービスをやった店もある。こうした、「人々の暖かさ」「何か人の役に立ちたい」という強い思いが復興への原動力となったのだろう。震災後の5カ月間で東北には100万人以上のボランティアが入った。ミュージシャンや、美容師、整体師などもいらしたとか。  
「津波に流されて負けてやめるのはだめだよ。再開してそれでもダメなら仕方ないよ」と、我が子に諭され再開を決めた床屋さんがある。かかった経費

# Post 3.11 震災、その時。 そしてこれから。

の回収はおそらく不可能だろう。だが負けたくない一心なのだ。

地震発生から20分以内に避難するのが生存の限界と言う調査結果がある。すぐに行動しなければならぬ。今も地震警報が鳴れば、深夜であれ飛び起きて避難所へかけて行く。24時間スリーパーに買い出しに行く人もいる。ガレキはなくとも3、11以来、落ち着いて寝られる日はないのだ。  
被災地の治安が海外メディアで絶賛される程、必ずしもよかった訳でもない。報道されずとも詐欺や略奪もあつたと聞く。だが…。

### 壊れたパソコン、消えたデータ

IT関係の事業を営み、当協会の会員でもある栗和田氏は、閑上地区からほど近い名取市で地震にあつた。家財道具は倒れ、ガスも電気もストップ。家屋の残骸や車が流されてきた。仙台市内まで行けば電波が入るが自宅では携帯も繋がらないため親戚とも連絡が取れない。インターネットにも繋がらず、情報源はラジオだけだったとか。「どこへ行動したらいいかわからない」  
深夜、体育館で体験する余震。天井の照明が揺れると悲鳴が起きる。熟



基礎だけが残った家の近くに転がるフェラーリのモデルカー。この持ち主に夏休みを返してあげて欲しい



株式会社 EarthOrbit  
代表取締役 栗和田 剛氏

睡とは程遠い1週間の避難生活が続いた。幸い、自宅マンションに早く戻れたが、「パソコン整備士としてなんとか手助けをしたい気持ちがあったのですが、動く事もできず、それが残念です」と思いを吐露される。「マスコミは起きた事を伝えるばかり

で、これからどうするかを全く伝えてくれない。今後、どう復興して行くかを行政が考えて欲しいんですよ」  
全滅した機械類では今も業務再開のメドは立たない。会社を建て直すための助成金を申し込んだが、『決算書の提出』を求められた。しかしそのデータは壊れたパソコンの中だ。出しようがない。途方にくれてしまう…。それどころか、あることに疑われる始末。あんまりではないか。被災者証明を取るだけでもひと月かかるのだ。  
「会員同士でのネットワークを活用し非常時には助け合う体制ができるとよいですね」課題が見えてきた。データは、壊れたパソコンはどうなるのか…。

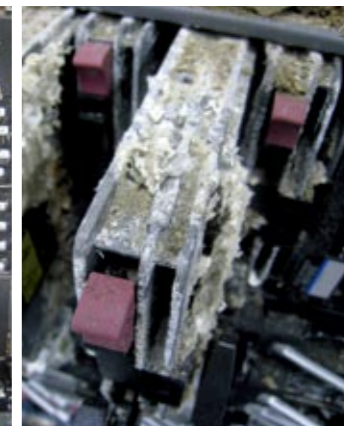
## Chapter 2 Salvage

# 命がけで 救い出した データ

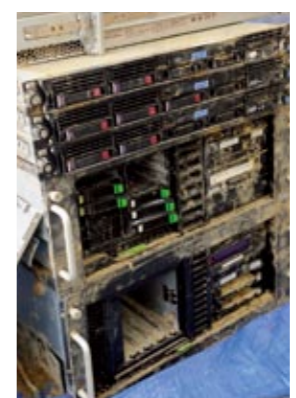


「こんな泥だらけのパソコンは見ただ事がない！」見れば誰しもそう口にするはず。真正銘想定外。正にこのまでの酷さは想像もできなかった。だが現実には目の前にあるのだ。ここにも想定外では済まされない現実が。素人目にはゴミしか見えない。よもやここからデータが救い出せようとは、誰にも思えなかったに違いない。(写真上)

下の写真は、海水により腐食してしまったサーバー、HDD、プラッターである。これらもどう考えてもデータ復旧は無理そうだが、この病院のサーバーの中には、患者の大事なカルテが収められている。なくなったはずではなかった。データサルベージではこれをも救ったのだ。



下段中の基盤は、本号の表紙で、皆さんに立って頂いている「地面」だ。腐食し、変形してしまっているのが分かるだろう。



### もはや想定外ではない。現実だ

2年前に登場いただいた、仙台のRDVシステムズ、松本社長にお話を伺おう。かつての社屋は地震で壊滅的被害を受けた。が、ちょうど震災の数ヶ月前、都心部でも空き部屋があると聞き、移転したばかり。判断が遅ければ今こうして営業してられるか分からないところだった。

「もう、凄いものでしたよ。復興なんてまだまだ先の話です。大変ですよ、こっちは。揺れた時は東京で会議の最中でした。まさか地元仙台が震源地だとは思わなかったですね」



以前のRDVシステムズの社屋。2階の全面ガラスが完全に割れ、室内は天井崩れ落ち、床もめくれ上がるという惨状だった。目の前にある山が揺れたのだと言う。

会議でいざ本題に入ろうかというその時に揺れた。仙台には社員一人だけ残っていたが電話が繋がらない。心配した知人たちはメールがたくさん飛んで来る……。カップ麺をひと月分買い求め、新潟経由で仙台へ。帰路には18時間を要した。

「私はいいですが、人によっては着の身着のまま放り出され、雪まで降ったのだから堪りませんよね」

多賀城市で津波に遭遇した知人は、屋上で遺書を書き出したという。正に地獄絵図だったのだと思う。

「阪神大震災も見てきましたが、この津波による被害は比較になりません。

「仙台は湾岸ですから復興はまだ早いのですが、他の地区は酷いものです」セキユリテイが切れてドアが開かなかったり立駐が動かないのは困りましたよと苦笑されるが、家ごと失った方々とは比べるべくもないのだとも。

全国の拠点の管理のため、氏の出張は日常的だ。しかし空港も閉鎖したこの春は新幹線が復旧するまで東京まで出でから飛行機で各地へ出向かねばならなかった。一方でオフィスには食料品や衣類が山積み。農家では畑が海水に浸かったため、作物ができない。食料品は重宝したようだ。

「何から手をつけてよいのやら分から

17年前、松本社長は苦慮の末アメリカの事例を知り出張シュレッダー事業を始めるに至った。機密書類の処理は確立したが、PC関連メディアのリサイクルパターンはまだだ。そこで出張シュレッダー事業同様のオンサイトゼロサービスを立ち上げたのが数年前のこと。メディア消去専用開発された特別仕様車「ゼロ・カー」で得意先に出張し、目の前で処理を行う。社外へ持ち出しのできないデータの場合は、データ消去マシンを事務所内の保管場所に移動させての消去が可能、社外への持ち出しなどによる漏洩はZEROという訳だ。

ここでパソコン整備士協会との繋がりができた。「埋もれた宝を再利用できるルート確立させて行きたい、データ消去をもっと広げて行きたい」という松本社長。2年前には「将来的にはこのサービスを全国的に確立し、地域密着のサポートにしていける予定」だと伺ったが、それは着実に進んでいる。

中では、ネットが有意義さや価値を生むことに多くの人が気づいた。商売が、街が止まっている。病院ではカルテが全部流されてしまった。怪我人、病人の診察もままならない。もはや想定外ではすまされない。嫌でもこれが現実なのだ。「皆に見に来いと言っています。テレビで見ただけで分かった気になってはいけません」

確かにそうだ。自分の目で見て確かめないと、この震災の規模は分からない。そして可能ならばボランティアに参加して欲しい。「頑張ろう」ではない。被災者が頑張らずにすむよう、我々が動かなくては。

### 救わなければゴミだった千台のサーバーとパソコン

データ破損。通常であればともかく、今回は手を挙げる業者も人もほと



店頭の貼紙。この、わずか3行の告知がきっかけで千台ものHDD、いや、千人の想い出と財産が救われたのだ。



株式会社データサルベージソリューション 相沢道男氏

「不可能を可能にした男がいた。それが松本氏が賞賛される阿部氏である。「生まれ育った地元がこんな状態になってしまった。何か役に立つことができないだろうか」

仙台に生まれ、今は東京にオフィスを構えるデータサルベージコーポレーションの阿部社長は胸を痛めた。結果的には、同社は夏までに千台のサーバーとパソコンを救った。そうでなければゴミになっていたものだ。

「てんでこまいでして」という言葉に大変さが忍ばれる。震災を知るとすぐに帰省し活動を開始。まず行政、病院に伺い、とにかくデータを救い出したいとアピールした。地元で貢献したいという思いももちろんあった。

「無償でやらせてほしい。救えるデータがあるはずなんです」

本業であるデータ復旧の技術を活か



株式会社データサルベージコーポレーション 代表取締役 阿部勇人氏

「津波でデータをやられていると思うので、なにかできることはないだろうか。(私には)仲間が多いだろうか」と言われるんです。僕は「データ復旧の必然性には気づかなかったですよ」

会社でできた時から知ってはいいたが、こんなことでもなければ絡むことはなかったかもしれないという松本氏と阿部氏。二人とも仙台、東京を行ったり来たりで連絡もつき辛く、Facebookが役に立った。余談ながら、テレビは東京目線、電話もままならぬ

## 救われた107人の想い出

これら千台のパソコンを救うきっかけとなったのが、塩竈市で写真館を営む柴原氏との出逢いだった。卒業式まで撮影された卒業アルバムは珍しかろう。津波の様子までもが載っている。

「大人になった時、このアルバムがどれほど貴重なものであるかが分かってくれば」柴原氏は、そう振り返る。

入学から卒業までを追い延べ1万枚を撮ってきた。授業風景、遠足、修学旅行：ほとんどの行事に参加し、撮影をしてきた。だからできあがったアルバムには生徒達の姿が躍動している。自宅にあった写真がすべて流され、これが唯一の想い出となった子もいる。

そのアルバムとなるはずだった貴重なデータが入ったHDDが水没。

「年老いた時に想い出が蘇るでしょう」という思いで、柴原氏は復旧先を探した。金をかければ復旧できることは知っていたが、業者によってはリスクもある。震災直後、撮影データが破損して困っている旨の記事が時事通信に掲載されたのを見た友人達が探し当ててくれたのがデータサルベージであった。

ガレキの街を自転車で2時間半！柴原氏は仙台まで走った。

「初めて気づいたのですが、塩竈から仙台まではゆるい坂なんですよね」と苦笑い。そのうえ路面は凍っているから命がけだ。しかし「命より大切なデータですからね」と胸を張る。

公共的なデータは無償で復旧させると決めていた阿部氏は、「107人の写真が入るアルバムは107人の想い出が詰まった公共的なものである」と判断。無事にデータは蘇った。「赤字でも仕方ない。責任は果たさねば」



株式会社データサルベージ  
コーポレーション  
取締役 沼田 理氏

不眠不休でハードディスクを洗い、そして爾々と復旧にあたる日々。

「私は帰してもらえたのですが、社長は帰りませんでしたからね…」と相沢氏。このピークがひと月以上、ゴールデンウィーク前まで続いた。そこで終わった訳ではなく、持ち込みから配送へと移り、気仙沼などからも送られてくるようになった。後には『ビデオカメラの復旧』も告知したのでその依頼も増えて来た。ハードディスクを使っている以上、要は同じである。フロッピーやCDなどもあったとか。メディアであれば基本的には何でもオーケーで、SSDやUSBメモリーは物理的損傷がないだけに復旧率は高い。

作業はまずHDD自体の洗浄から始まる。次にプラッタの洗浄。その後クローンを作り、そこからデータを読み出す。世界に一つしかない唯一無二のマスターディスクは絶対に触らない。これが壊れてしまつてはもう、どうにもならない。認識はするがデータが出ない事もある。転倒が先か水没が先かによって壊れ方も異なってくる。サーバーはRAIDになつているから2個3個読み取れないとまともなデータとして引つ張れない。苦勞の連続だ。「今回は完全に水没して腐食してますからね。正直大変でした。お渡しする時、泣いていたご家族もいらつしやいました」

普段ならば不可と判断するものでも



右上から「津波直後」「ガレキ撤去時」「現在」の写真屋さん21だ。ガレキとはいえ、それは財産だった。消えてしまった時はとても悲しかったと語る。写真左は新聞に掲載された時。下が苦勞の甲斐あって、見事に完成した卒業アルバム。喜びもひとしおである。



写真屋さん21  
柴原 章氏

と覚悟していた柴原氏は阿部氏の申し出にとっても感激された。

津波が来た時、柴原氏夫妻はカメラ2台と愛犬を抱えて高台へ逃げた。店内は高さ1.5mの水に浸かり、失った機材は数千円円の被害に上つたが、嬉しかったのは仲間達からの義援金だ。復興と再開に欠かせないのは現金なのだ。ボールペン一本であれ、お

「流された子供の写真なんだ」と言われたら誰が断れようか。涙を流されれば疲れも吹っ飛ばす。

## 見えてきた意外なこと

さてプラッターを読めなくなるのが一番の問題であるが、見た目酷くてもプラッター自体は無傷だというケースもある。東北人の性格として『一度断られたら諦める』という傾向があるようで、まだここを知らずに諦めている方もいらつしやるはずだ。

同社の沼田氏は強く言う。「水没してもデータは救えるんです。無理だと決めつけず持つて来てくださ」と。今、東京のオフィスには、そのようにして持ち込まれたたくさんさんのHDDが積まれている。

「可能性があるうちは断らずに受けています。今は復旧率25%だがもう少し上がるでしょう」と。たとえ時間はかかって、その価値には替えられない。「しかしデータというものは意外と出てくるものなんですわ」とも。最初の1週間では80%が救えた。翌週は40%以降、毎週半減して行つた。もし真つ先にデータを救い出せていたならば失われた大半が復旧できた計算になる。現実にはガレキをひたまず取り除き、生活を確保してからだったので、復旧する側から言えば、この失われた一ヶ月の空白は大きい。が、致し方ない。命と生活こそが最優先なのだから。

ようやく問い合わせが落ち着いたのは7月半ば。ともかく、データサルベージの猛者たちは、思い出を救い出すために努力を惜しまなかったし、直後に始めたという価値は計り知れない。どうしたら破損を少なくできるだろうか。バックアップが如何に大事かというの分かつているが、それが本体の隣に置いてあったので一緒に流され

金があれば手に入らない。行政は配れない理由を考えている猶予などないはずだ。方法はいくらでもあろう。い

今はもうほぼ片付いているが、最近までとんでもなくごった返していたという、仙台のオフィス。(写真下段上)ハードディスク型のビデオカメラも持ち込まれている。(写真左)超音波洗浄機で大まかな汚れを取り除いた後、東北大学と共同で開発した特殊溶剤で処理。それ以降は顕微鏡を用いての緻密な作業となる。(写真下段中と下)RDVシステムズが新聞に折り込んだチラシ(写真左下)自社業務の告知に加え、データサルベージとの連携を謳っている。

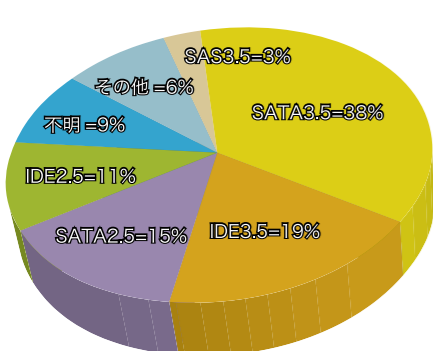


**HDD寄贈のお願い**  
法人ばかりでなく個人の方でも「何年かかってよかったので、水没したデータから家族の写真を救ってください」等、200件以上の復旧希望があります。このような未復旧の被災地パソコンを救うために、大量のHDDを必要としています。新品/中古問わず、ご協力ください。  
■送り先 〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビルB1F 株式会社データサルベージコーポレーション宛 03-5772-2370  
■パソコン本体は不要ですのでHDDだけをお送りください。壊れていないものに限ります。  
■送料は着払いで結構です。  
■お問い合わせは株式会社データサルベージコーポレーション(03-5772-2370)までお願いいたします。

てしまったというケースは多い。サーバーは極力高い階に置くのがよいが、しかしそのような対策よりも、遠隔地に置くのが確実に違いない。

それでは、オリジナルとバックアップ。救えた方はどちらだったか。答えはオリジナル側だったが理由が興味深い。バックアップ用に使われる大半がSATAで、届いたものはやはりSATAだった。オリジナルはSASだ。安価なSATAではなくSASの方が堅牢性が高いので復旧率も高かったことが実証されたのだ。SASは寿命だけでなく津波にも強かった。皮肉なものだがこの震災がなければ分からなかったことだろう。腐食したSATAからはチップがかな

データサルベージに持ち込まれたHDDの種類  
4割近くがSATAである。



つになるか分からない公的義援金より、知人・友人からの助けがどれほどありがたいことか。

数百ギガもの写真のデータが来るのは予想外だったという阿部氏は、これを期に東北大学の教授にも救援を求められたのだ。

柴原氏同様に95%以上が水没だったHDD。復旧で肝腎なのはHDDを外してから。孤立した仙台からは東京に送れず、ひとまずはこの場所ですべての作業を行った。再び松本氏に伺う。「中古でよいのでHDDを用意して頂けないかとも頼まれましたね。溜めてあったHDDを送りましたよ。消すのは簡単だけど救い出すのは難しいですよ。彼は本当に一生懸命やってらっしゃいましたよ」

チラシの新聞折り込みもされた。

「仲間がいるから助けてやるよ」と快く力になっていただいたのはとても感謝に堪えないと阿部氏は振り返る。

「ビルのオーナーが2階を貸してくれたので大変助かりました。広いフロアに、これもお借りした洗浄機などを並べて作業しました」



り外れてしまう。SASの方が基盤自体も確実と言える。メーカー別、機種のデータを取っており、最終的にはしっかり検証される予定だ。

「高いので普通はあまりお勧めしないのですが、こういう事態を想定すればここは経費削減しない方がよいのでは」とは沼田氏。

繰り返すが同じブラックに入れておいては無意味だということもキモに命じておいてほしい。

## ハードディスクが足りない！

復旧との戦いはまだ続く。この本がお手元に届く10月の時点でも終わってはいない。そして復旧にはHDDが不可欠なのだから常に不足しているのである。ディスクが生きていても同形HDDがなければ救えるものも救えない。提供できるという方がいらしたら、ぜひ協力していただきたい。(どれを必要とされるので、とにかく何でもいので送ってほしい。※右記参照ください)

復旧料金はどうかだったのだろうか。パソコンの場合、定価で30万円である。(サーバーはケースによる)NGならば0円だ。HDDを買うだけでコストがかかる以上、ディスクカウント



データサルベージコーポレーションに、ずらりと並ぶハードディスク達。出番を待っているのだ。例え同型機種であっても、製造時期によって仕様が異なったりするため、数が勝負という面もある。

して受けては赤字が必至だ。しかし、現実にはケースバイケースで、一切を失った人にとっても定価とは言えない。平均額を出せば10万円だと言っただ、ボランティア精神であるにせよ、自らが潰れてしまったのでは元も子もない。

「リカバリー業界は単価が下落傾向にあります。料金がブラックボックスになっていったのが一因ですが、今後はこれを明朗会計にしていきたいですね。高価なものにはそれなりの理由がありま

# Chapter 3 POST3.11

# コンピュータ と関わるもの



株式会社 日立システムズ  
ICT基盤営業統括本部 市場開拓本部  
佐々木慎一氏

時も暗号化されており、証明書がないと入る事ができない。ユーザーID等でよく使われる8ケタ英数字のパスワードは、わずか数日で解読されるケースもあるが、それよりも強固なセキュリティ環境だ。ユーザーごとにアクセス権のコントロールができ、どのアカウントでどのファイルが操作されたかも一目瞭然で、万が一不正があった場合の追跡が可能。有償となった際も非常にリーズナブルだ。これならば小規模事業主の方でも抵抗はないだろう。

Cloudではアプリによる作業をすべてWEBブラウザ上で行うという100%WEBを掲げる。他、ニフティやヤフーを始め、多くの企業がクラウドに参入している。BCPはもろんだが、所有から利用へというクラウド時代が本格的に始まっている。オープンなクラウド環境を構築し標準化しようという組織もあれば、さらにその数歩先、SaaS、PaaS、IaaSに続いてネットワークをも仮想化し、異なるクラウド同士を繋いで有効活用すると言っているクラウドの構想も進められている。

ただ、クラウドが発達し定着した世界では、高性能なパソコンの存在価値は乏しくなる。何テラものHDDや、数GHzものクロック周波数も必須ではない。いつ頃からアクセスしても同じデスクトップで同じ作業ができるのが特徴であるから、形態もパソコン

大船渡から乏しいガソリンで走って持ち込まれた方もいらした。皆必至なのだ。だが某公共機関のHDDを救った際は困った問題があった。個人情報報セミナーを受けないと受付もできないというのだ。社長自ら受講し事は取ったものの、一刻も早く救い出したにも関わらず、行政上の障害がここにもあった。非常時くらい超法規的な対応を望めないのか？ データ復旧のために国家的体制が必要だと痛感し、今は国にも訴えかけてもらいたい。

「世界で一番洗浄しましたよね」と相沢氏が言うように、世界初と言ってよい海水や汚泥による被害からのデータ復旧をここまでやった企業はないはずである。同社はロシアとイギリスのデータリカバリー企業など海外からも注目され始めた。ハーバード大学から今回の実績をデジタルアーカイブとして残さないかとのオファーもある。

「できたのはいろんな方からの応援があったからです。みんな助けてあげたという、いいムードがありました。もしどこかで震災が起きたらすぐに飛び来んでいきたいです。喜んでいただけるのが一番嬉しいのです」

阿部氏の言葉に胸が熱くならないだろうか。だが、聞いて感心している場合ではない。

に限らず、スマートフォンでもタブレットでも、ただWEBに繋がっていないさえすればよい。実際の作業はすべてデータセンターで行われるのだからOSの違いすら無意味だ。コンピュータのリリースは、データセンターに集中集約し、利用する側はこのようになるだろう。そこに至るまでの期間はまだしばらくあり、次の大震災とどちらが早いのかは分からない。が、どちらにも備える必要だ。今はともかくデータHDDを救うこと。クラウド時代では、その保持が課題だ。すわ津波！その時、本来は身一つで逃げるべきだと思う。データがきちんとヘッジされているか、バックアップには及ばないはずである。東北の工場が被災した結果、世界的に自動車の生産がストップしてしまつたように、局所的被害だけでは済まないのが21世紀の震災である。マクロ的規模で考えなければならぬ。クラウドを積極的に導入しリスクヘッジを図るのは必須であり、もはや自分には関係ないという時代ではない。

だが事はそう単純には運ばない。なるほど遠隔地にバックアップがあれば憂いなしではあるのだが、それは資金力をも必要とする。個人や個人事業者はそこに数万円もかけられないではないか。また、帳簿データ等であれば軽いためまだよいが、先に出て頂いた柴原氏のような写真館だとどうだろう。一度撮影に向ければ5ギガものファイルができるのだ。おいそれと雲の上に預ける訳にもいかない。原価が売りに上るを上回ってしまう。さりとて2階に置いて津波が避けられても、火事が起こったらどうする？

バックアップデータもすべて破損した柴原氏はこう言う。「月数万のコストは無理なのです。HDDを持ち運ぶかDVDに焼いて遠くの知人に預ける

## 次の震災に備えて

一口に東北というが、それが如何ほどの広さなのか、認識できているだろうか。仙台から青森までの距離は、仙台・東京間と同程度である。今回の震災では、この広い東北に留まらず関東東北から北海道南部までが被災したのである。距離にしておよそ1200km。そのまま西へ置き換えてみれば、東京・博多間に相当する！とんでもなく広範囲であり、予測される東海・東南海・南海地震の範囲よりもさらに広いのだ。

また、もしこの地震では大都市圏が多いだけに被害はさらに甚大で、阪神大震災級火災の後に東日本大震災級津波が来ると言われる。九州全土にまで津波が広がる懸念もある。これではもう既存の防波堤や堤防は役に立たない。道路は川となり津波は高速で深部まで押し寄せる。しかるに自治体の半数以上が国の対応待ちだという。それでよいのか？ 国も手をこまねいている訳ではないが民間の対応は早く、既に工場の移転や避難用ビルを計画し始めたところもある。だが、被害規模を考えれば、それはやはり国や自治体の仕事だ。阿部社長の言葉ではないが、国策とせねばならないはずだ。

地震翌日の衛星写真に東北一帯の光はなかった。東京・名古屋・大阪の三大都市が壊滅、横浜・神戸・岡山・広島、さらには九州までも光を奪われたら、日本は一体どうすればよいのだろうか。東日本大震災での教訓は如何に？被災していない人にとっては、例えば地元であっても既に風化した今回の震災。ましてや数百キロの距離と半年の月日は、忘却を余儀なくする。しかし、これはどこか遠いところの過去の出来事ではない。明日、あなたの街で起こるかもしれないのである。

「パブルがいんですよ」元SONYの出井氏はその著書で述べる。誤解無用、夢と希望を持つという意味だ。陳腐な言葉ではあるが、それなくしては個人も世界も生きる意義を失ってしまふ。天変地異に政治不安。行き詰まった世界にあって、次の新たな時代を担うのは、今の苦難から立ち上がった日本であってほしい。単なる復興ではなく、これまでにない創世。それが可能かどうか、その手腕が問われている。希望を捨ててはいけない。

日本のデータセンターは従来、高すぎるし過剰品質だと言われてきた。しかし今回の被災でもサービスは止まらなかったどころか仙台市内では一つも



## BCPとクラウド

震災以降、民間で急速に普及が加速しているのが、BCP (Business continuity plan) 事業継続計画。クラウドだ。BCPは、突発的なアクシデント時に、遅滞なく事業を続けられるようにするというのが、クラウドの導入はその一部。「通常想定しているBCPではまったく対応できなかった」という仙台に本社を置く企業の例があるので甘く見るのは絶対禁物である。まずは従業員の名を守る。それが先決。事業を継続しようにも人なくしては立ち行かないし、何より尊ぶものである。そこを確保して初めてデータだ。重要なバックアップデータは、リスク分散のため遠隔地に保管しておくことで被災後の復帰がスムーズになる。

クラウドの事例をあげよう。日立システムズでは、クラウドサービスであるセキユア保管庫を、震災にあたり無償提供を始めた。元々20人未満のスタートアップに使用しやすいうサービスと企画したのだが、「問い合わせを多くいただくのですが、まずは被災地の企業様にお使いいただきたいです」と、同社の佐々木氏。

「バックアップという感覚ではなく、データを共有するというのが、任意のグループで共有できますので、銀行の貸金庫のイメージですね」

セキユア保管庫は複数ユーザーが取りに來たり置き換えたりでき、その操作履歴を残せるサービスである。接続

壊れていない。我が国のインフラは世界に誇ってよいのだ。ここまでの堅牢性を示した事を称し、海外では「あり得ない、信じられない」という賞賛の声がある。ではあるのだが、世界のクラウド市場で日本の占める比率はたったの1%！9割以上をアメリカに握られている。言わずと知れた三巨頭には誰しもお世話になっているが、国の基幹産業や国家的な情報を外国のデータセンターに預けてよいものか？

「命でんでん」先人の津波に対する言葉ですが、津波直後、我先にとパニックになるかと思いきや、皆他人の心配ばかりしていたんです。自分よりも他人を守ろうとする。それで命を落とした人もいたとか。美しすぎる日本人のその姿に心うたれました。

そして津波後、生き残った人達ですぐに強い助け合いの体制が生まれ、自然に一人一人が役割を察し行動していました。この体験は子供達にきちんと伝えて行きたいと思えます」

冒頭のカメラマン佐藤氏の言葉だ。世界にも例のない博愛精神溢れる国民性と、類い稀なる技術力を併せ持つ日本。ここに新生日本がグローバル展開していく可能性が秘められている。取材から帰宅してみると、近所で子どもが楽しそうに声が聞こえてきた。向かい家の花火である。東北でも、津波が奪っていかなくなったならば、皆さんの同じ光景が見られたはずだ。その幸せは帰って来ぬが悲劇を繰り返さずにはならない。

「平和ボケは命をなくします。日常では想像できない様々なトラブルが起こるのです。避難所には人が溢れパニックに。集合住宅が多い都会ではマンション内での避難体制を考えておくのがよいですよ」と柴原氏。そう、行動するには『平和な』今しかない。